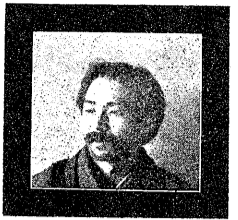


故萩原守衛君追悼記

犀水生



彫刻家故山萩原守衛君の追悼會を、五月七日午後一時から、新宿淀橋水道浄水所前のレバノン教會で催うす、と云ふ案内状が、高村、布川其他諸氏の名を以て來た。萩原君の作は常に注意を拂ふて之を見、其説は新聞雜誌を透して愛讀して居て、是非一度訪問して、親しく其警咳に接したいと思ふて居たが、未だ其機を得なかつた内に、突然此有望なる藝術家の訃を聞いたことは、深く遺憾とするところであつたので、當日は席末に列することにした。

教會堂は小さな建物であるが、鮮やかな新緑に包まれて居るので、俗塵を絶して居る様に感じた。教壇の側には棕櫚竹や、ゼラニヤムの幾鉢が置かれ、説教臺の上に、可憐なる紅のチュリップが兩三輪挿されてあつた。其前面に掛けられた肖像、黒き布に纏はれてあるのを見れば、無論故人の肖像であらう。素樸らしき其風采、眞摯らしき其相貌、見るからに悼まじき心地がする。

同郷の親友とて井口某氏は熱心に故人が幼時よりの閱歷性行を語つた。面白き逸話が多かつたが、其内の二節を茲に抜く。

曾て萩原君が、藤村氏の『春』を評して、藤村の文は實に底力があるといつて感心した。そして萩原君自身も、その底力なるものを養ふことを心掛けて居たやうである。

又常に當今の美術家は職人根性があつていけないと慨歎して居た。

次に故人が在米以來の友人、横田、富尾兩氏の語つた追憶談に依つて考へると、故人は深く且つ高き宗教的信念を懷いて居た、そして其心事の清く其性行の正しかつたこと、並に意志極めて固く、而かも同情に富んで居たことが察せられる。横田氏の話の内に、面白く感じた一節は、

曾て故人の作『文藝』を見て、斯んなにゴツ／＼した力瘤を現はさねば、力と云ふことを示すことが出来ぬものかと尋ねたら、いやそれはまだ自分の技術の足らぬ爲だ、弱いものに強い力を

表はすことが出来なくてはいけない。是から自分の大に苦心研究するところはそこだと云つた。

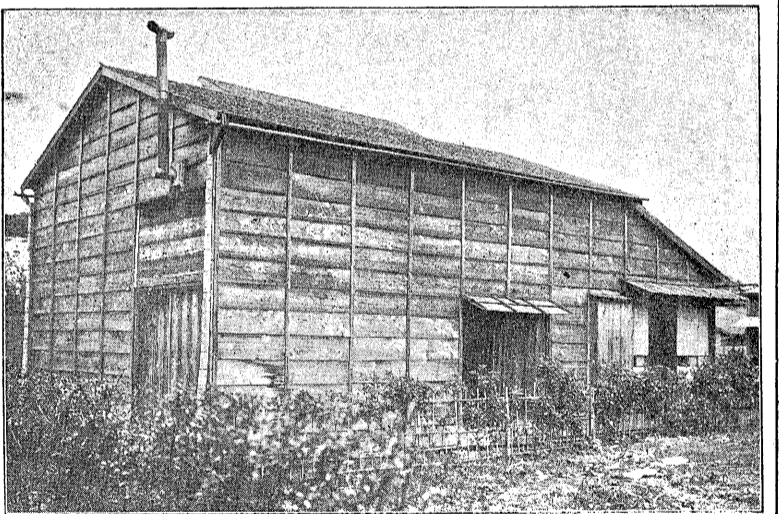
其次に中村不折氏の語つた内には、敬服すべき逸話が多かつた。

三十五年に巴里でコロロシユに學んで居たが、次でアカデミー・ジュリアンに轉じてローランスに學んで居た、パンとバターさへあれば、人間は死ぬものぢやないと云つて、貧乏な生活を忍んで居た、初はアメリカ風で大ざつぱなやり方をして居たが、ローランスの教へ方は裸の替古を重んじて、先づ腕一本の替古をやらせる。基礎さへ確乎と出来れば何でも自由なことが出来る云ふ主義である。そこで萩原君は腕一本を一生懸命に研究して、半年間平然として腕一本を替古した。或日先生が來て見て大分巧くなつたから、そろ／＼からだを描けと云つた。けれどもまだ腕一本が充分にかけないと云つて、矢張り腕一本を替古して居た。愈々金に窮して、再び米國に歸つて稼ぐ爲に、近日立つと云ふことになつても矢張り腕一本を替古して居た、常に「手一本卒業しない奴は、何をやつても出来るものではない」と云つて居た。腕一本を一年間眞面目に稽古した者は、前後恐らくは萩原君の外にあるまい。ローランスも前途に望を屬して愛して居た。

英國では南ケンシントン博物館で、ラファエルの壁掛の下繪を見て、深く感心して、是非羅馬馬に行つて此大家を研究すると云つて居た。其後四十年に佛國に來て、ロダンの作に敬服して、書を廢して彫刻に轉じて、ジュリアンの彫

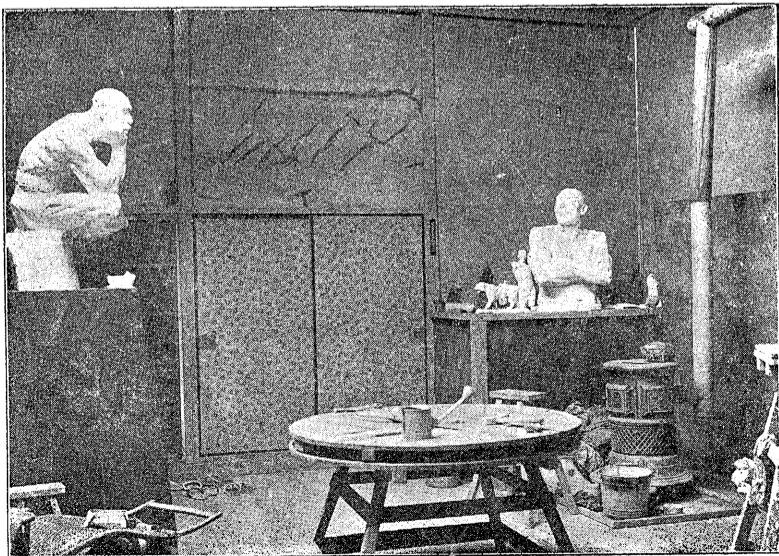
刻教師に就て學んだ、ロダンの會つたさうだ。ムニエにも敬服して居た。彫刻に志してからも、繪畫をやつた時の通り、土を振ねることから始めて、順序を踏んで進んだが、三月四月と經つ内に、次第に頭角を現して、教師も同窓も驚く程になつた。

巴里の學校では冬になると競技と云ふ事があつて仲々盛んなものである。之に應ずる連中はサロンで銅牌位取つた手合が交つてゐるから、年は若くても資格は堂々たるものである。及第した製作はマンシヨンと普通作品とに區別し、マンシヨンには成績に依つて番號を附ける。其第一號以上の傑作には特にプ



萩原氏のエリトア

上席を占めると云ふ事は、佛國人にさへ例が無いさうである。それで、日露戦争の後であつたもんだから、斯んな人間が居ちや日本の勝つたのは當然だと謂つて感服して居たさうである。歸朝後も洋行風を吹かせる様な事もなく、着實に研究して居た。萩原君は大ざつぱな様に見えるが實は小心翼翼たる人で、非常に温厚篤實で、品行も方正で女色や金錢の慾も極めて淡泊で、朝から晩まで藝術の研究に耽つて居た。多くの藝術家は地位を作る爲に洋行をして、歸朝後は銅像やなにかに手を出して金儲にあせるのが普



エリトアの内部



『女』 絶作

イの名稱を與へ、賞牌一個に金百法をやる事になつて居る。萩原君の競技に應じたのは二年目の十月で、其時マンシヨンの第一席を得、引續き十一月の第二回、十二月の第三回にも首席を得、一月の第四回にもプリーを得、二月の第五回にも又プリーを得た。斯の如く競技の一期間續けて

通であるのに、萩原君の洋行は眞に藝術の爲であつた、全るで金儲などに手を出さなかつた、始終貧乏に甘んじて居て、偶に雑誌などから原稿料でも入ると原稿料を壹圓五拾錢貰つたやうな云つて居た。生活の資金は國許の兄さんから受けて居たが、斯くの如く一生を藝術の研究に委ねて他を顧みず、最後まで奮闘したことは偉らしいことである。

去年の文部省展覽會に出した北條虎吉の像、日英博覽會へ出した宮内氏の像や、絶作の『女』などは老大家の作品の如き感がある、後年萩原君

の傳記が分らなくなつて、此等の遺作だけを見る人は、老大家の手になつたものと鑑定するであらう。

此等の逸話を聞くにつけても、故人を欽慕追惜するの情は今更らに切なるを覺えた。噫眞に藝術家らしき藝術家たりし故人、故人の所謂職人根性に充ちたる藝術家のみ多き今日、まことに珍重すべかりし故人の夭折は、我藝苑に取りては、測るべからざる損失であつた。高村氏が挨拶の詞の中に「どうも神様が十露盤違ひをなされたとはか思はれぬ」と曰つたのは、同感である。銅像受負の競争には、友を賣り、人を欺き、利維れ追ふて、寸毫も藝術の何たるを思はぬ、今日の所謂藝術家連に、萩原氏の爪の垢でも煎じて飲ませたいと思つた。



北條虎吉の像 (作年二十四)

萩原氏追憶談

柳氏の畫室で、(Y) 柳敬助君。(T) 戸張孤雁君。(S) 齋藤里君。(N) 中村屋主人。四君が相會して、故萩原君に關する追憶談が始まつたことがある。記者は許諾を得て、要領を此處に摘録する。(鳥呂)

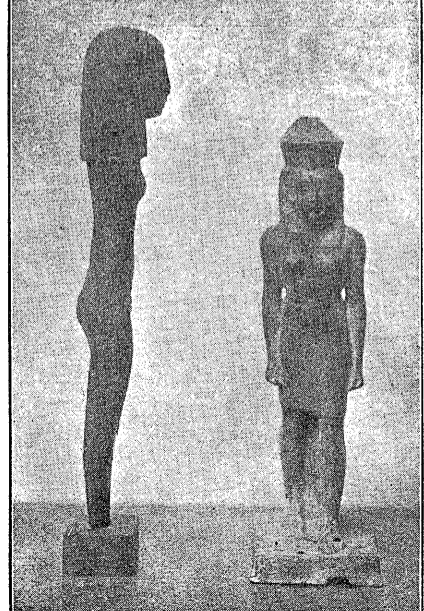
(T) 萩原君は眞ッ暗な箱の中で生活をしてゐた。萩原君の部屋は薄ッ暗くツツて狭いから箱と言つた方が好い。箱の中で研究して、箱の中で製作して、箱の中で死んで了つたのだ。君の座つてゐる部屋、君の寢てゐる部屋、君の勉強してゐる部屋は小さな天地であつたけれど、君の頭脳は大きな空間を占領してゐた。製作所や研究室ばかり大きくて、肝腎の頭脳が箱の中に入つてゐるやうな平凡な人物では無い。萩原君は此の箱の中で克く讀書をし

式後參會者の群に交りて故人のアトリエを見る、素朴なる木造の平屋、工場の奥に一室と臺所がある計り、主なキアトリエには、『文覺』、『デスベヤ』、膝より切り去られたる「労働者」などが、今は空しく紀念となつて遺つて居る。後庭の花壇には、誰を慰めんとてか、萩とデイジイが新芽を萌いて居るのも哀れだ。轉じて柳氏の新築の畫室に、故人の遺作を見る。絶作「女」は、我日本の女を表はしたものと、舊習の中に囚はれて、訴ふるが如く、悲むが如き姿である。遺作の畫は、總て大膽なる略筆を以て、印象を描き出さんと試みたるもので、一種の氣魄を含んで居る。畫室は人を以て満たされた。何人も此貴ぶべき天才を惜むの情を切實に語り合はぬものとはなかつた。

終りに余は氏の友人諸氏が、其遺作の保存に盡力するの美譽を深く賞讃し、それに依つて此眞に藝術家たるの精神と品性と天才とを具備したりし一青年彫刻家が、永く我藝苑の模範とせられ、教訓とせられんことを望む。
(萩原氏の略歴は前號に載せたるを以て今は略す。同氏の遺稿は友人諸君が目下編纂中であるが、近日日本社から出版する)

(N) 實際勉強家でしたネ。自分が思ひ立つた仕事は飽くまでも遣り遂げると云ふ非常に強い意思を持つてゐた人でした。
(Y) なか／＼強情ツ張だつた。
(S) だが友人の言ふことは善く聞いたよ。成程と思ふと直ぐに改めたからネ。思ひ切りが好かつた。詰り此の思ひ切りの好いと云ふ性質が今日の萩原君を成した所以さネ。最初繪を習つたらう、それから彫刻へ移つたらう。あの心機一轉が普通の者には出來ないよ。並の奴なら、下手と知りつゝ何處までも噛り付いて行くよ。
(Y) けれども、紐育に居る時分には、あれで中々煩悶して居たよ。心機一轉するまでには随分苦し

んだんだネ。何が動機であつたか能く知らないが、多分自覺したのだらう。平たく言へば、彫刻の方により多くの興味を感じたのだらう。
(S) パンサーの原型が小サロンにあるネ。先生、あれを見て甚く感心したらしい。ヒントを與へられたんだらう。それから、顔の研究はヴェトローヴェンに限ると云ふので、ルクサンブルグで熱心に研究してゐたよ。漸々ブリミチーヴになつて、古い物を研究し始めた。ルーブルへ來てグリークの物を調べてゐた。あゝ云ふブリミチーヴな物に眞の生命があるのだと言つてゐた。
(Y) ウム、然うだ。萩原君は克くライフと云ふことを言つてたネ。實際萩原君の製作は何れを見てもブリミチーヴだ。
(S) 繪は悉くアンプレッションリストだ。彫刻は皆グリークだ。
(Y) 初めの内はミケランジェロが好きであつたが、後にはドナテロが好きだと言つてゐた。ドナテロは何となく寂しいがネ。
(S) 一體萩原君の繪は暗い處から明るい處へ出て來たのだよ。見給へ、あの通り黒い繪が、斯ういふ風に白くなつて來てゐる。
(Y) 彫刻家としての萩原君は……サア何かから話したら好からう。餘り善く知つて居るので、却つて話がない。だが、アートに對しては熱烈な情を持つて居たのだネ。普通の彫刻家はモデルの記録をこしらへるやうな物だが、萩原君のは爾うぢや無い、モデルは何うでも好いのだ、氣持が出さへすれば。
(N) 仕事に掛ると實に熱心だつたよ。何にでも熱



遺愛品 埃及彫刻

心な男サ。
(Y) それでゐて、氣に喰はないとなると、惜し氣もなく打棄つて了つたものだ。あの「女」だつて爾うだ、中途で打壞して了うと云つたのを、高村君に止められて、やつと仕上げたのだ。友達と言ふことは克く聞いた。その代り嫌ひな奴と來ると頭から糞ツこなした。Love or hate だ、「好きで無ければ嫌ひだ！」萬事が其れさ。自分の好きな人と來ると飽くまでも密接する。いやな奴だと思ふと振向いても見やしない。
(S) 僕は一度絶交し損なつた事がある。なに本氣でやつたのぢや無いが、先生、眞面目に解しちやつてネ、何でも七八枚ばかりの手紙をよこした事があつたよ。
(Y) 口の悪い男だつたネ。遠慮も何も有りやあ爲ない、頭から罵倒するのサ。克く警句を吐いた。痛快だつたよ。
(T) ワンパクだけれど、憎け氣のない男さ。無邪氣でネ、可愛い男だつた。
(Y) 萩原君は服を買つた事があるかい。
(T) 有るものか。服なんぞ買う男ぢやない。みんな人の物だ。紐育へ來た時も服が無くつて困つて居たら、誰だか一着呉れたんだよ。先生、そいつを着て威張つてゐたよ。
(Y) 人の物でも何でも關やしない、自分の氣に入つたものが有ると、無闇に欲しがつたッけ。欲しいと思ふとズン／＼持つて行つて了つた。何時だつて。萩原君の部屋へいつて、靴の中を見たら僕の山家集が入つて居たよ。
(T) 服で思ひ出したが、「女」を製らへて居る頃だ